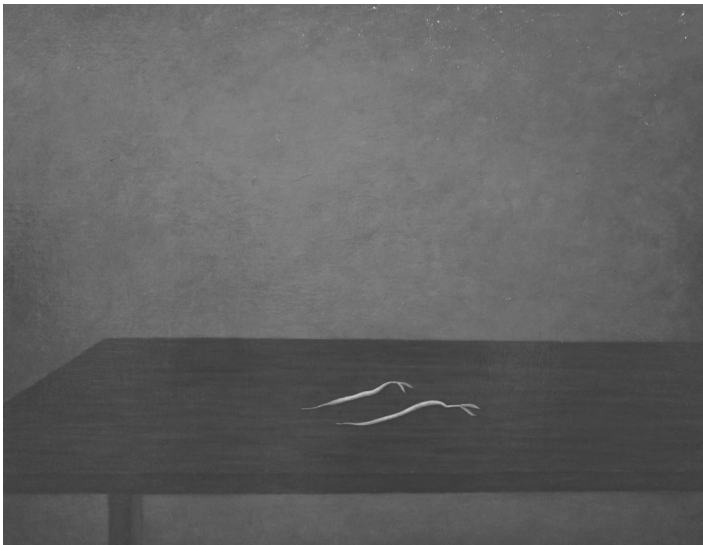


作家

横山奈美さん:インタビュー

「手探りのリアリズム」展の会場とところどころに展示されている、「もやしの絵」を皆さんはもうご覧になりましたか？ この度、素敵な作品を出品して下さった作家の横山奈美さんにメールインタビューできる貴重な機会を得ることができ、好きな作家である岸田劉生のことや、ご自身の作品のことなど語っていただきました。(H.M.)



《長い時間そこに居る》2013年 個人像

岸田劉生の作品の中で最も好きなのは静物画です。《林檎三個》も好きですし、《卓上林檎 葡萄之図》も好きです。今回日本のリアリズムの作家をたくさん観て、やっぱり劉生が気になると思いました。他の作家もとても誠実にモチーフと向き

Q 今回展示のシリーズの技法的秘密を少しでも教えて頂けたら・・・

あのシリーズ《ただ、そこで漂い続けることについて》は、フォンタナの作品に触発されて描いた作品です。フォンタナの作品を観た時に、些細な一筋、二筋の切り込みをキャンパスに入れることで絵として成立させることと、私の一本や二本のもやしを大きな存在として描きたいということが繋がるなど思いました。

技法としては、背景を絵の具で盛り上げて描いています。背景を盛り上げて描くと、モチーフのもやしは物質としては無いよう見えるけれど、描いたイメージとしてはもやしがあるように見える。無い、在るが一つの中に存在している。この作品をきっかけとして、1=∞の証明と言う個展をしました。フォンタナの絵を見たことが始まりとなって、自分の絵に対する思いに広がりが出た作品だと思っています。

Q もやし料理で好きなものは？ またご自身でも作りますか？

もやし炒めをたくさん作ります。いつもお世話になっています。やっぱりもやしと豚肉とキャベツの炒めものが最高の組み合わせだと思います。

Q 生活と制作について教えてください。

私の夫も画家です。同じ立場なので、お互いに協力し合って生活、制作をしています。お互いに作品を見合ったり、意見を言い合ったりします。彼の存在がなければ描けなかった絵がたくさんあるのでとても感謝しています。生活は大変なこともありま

すし、この先のことは不安もありますが、絵を描いているとそんなことは忘れていきます。絵を描く為に何とかできるようにするしかありません。この先どうなるのかわかりませんが、まだまだ描きたい絵がたくさんあるので楽しみです。

●横山さんが触発されたと言われている
フォンタナ《空間概念:期待》1960年
ニューヨーク近代美術館蔵

Q 高橋由一や岸田劉生など日本の古い油画に惹かれる理由はなんですか？

日本近代の油絵は、西洋から日本に入ってきて間もなく、その時代の作家たちは西洋の画家達のような作品を描こうと一生懸命だったと思います。でも、どうしても西洋の画家のように完璧で華やかな絵を描くことができない。絵は素朴で華やかとはいえませんが、その中で、彼らは日本人の油絵を描こうとしたのだと思います。特に岸田劉生は、自分の絵が西洋の絵画のような豪華絢爛な美しさとはほど遠いこと認め、自分なりの美しさや強さを見出したのだと思います。普段自分が見ているもの、感じたこと、考えていること、それは本当に些細なこと。その中には弱々しくて素朴でも、とても美しいものを見ることができるとのこと。そこに気づいたことで、彼にとっての真の美しさを表現できたのだと思います。私は、彼の些細な物事に美しさを見出す力と絵に向かう誠実さに惹かれます。

Q 岸田劉生の作品で特に好きな作品はありますか？ また「愛・知のリアリズム」で気に入った作品や、新しい発見はありましたか？

合っていて共感しましたが、劉生には冷静さも感じました。

Q もやしを描きたいと思った理由は？

日常生活の中で些細なものや人に見捨てられてしまうようなものに興味があり、見つけて描いています。その中で、もやしは私の中の些細なものの象徴です。普段の料理では大活躍してくれる存在ですが、もやし一本、二本だとお腹いっぱいにはならないし、人は気にも留めないかもしれませんが、でも、ある日もやし炒めを作っていた時にフライパンから、二本のもやしがいっぱい落ちてきました。その時、そのもやし二つが寄り添う男女に見えました。また違う日には一本のもやし自分が自身にも見えました。些細で小さなものの中に、魂が見える。それはとても素晴らしいことだと思ひ、このモチーフを選んでいま

